

## あまんじゃこ

「これ好きや。」  
と、言ったら、

「そんなん嫌いや。」

「これ、おいしいな。」

と、言うど、

「いいや、あじない。」

と、いうように、人の

反対ばかりいう人を、

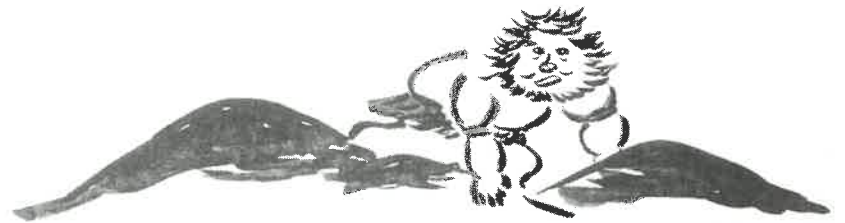
『あまんじゃこ』と

いっています。

この『あまんじゃこ』

の先祖が大むかし、

播磨の国にもおりました。



あまんじゃこは、立つと雲までとどくほどの大男で、あちこちの谷川をせき止め、水が流れないようにしたり、いたずらをして喜んでいました。

ある日のこと、笠形山のふもとに、元氣者の正太ちゃん、じゅんちゃん、佐代ちゃん、里ちゃん達が、お宮さんで遊んでいました。

たんす長持ち　どのがほしい

あのがほしい

あのがほしい　名をよんでおくれ

さよちゃんがほしい

なあになんて

うさぎになって

かってうれしい花いちもんめ

まけてくやしい花いちもんめ

あまんじゃこは高い山の上から、子ども達の遊び

や話を聞いて、

「よし、いたずらをしてびっくりさせたらか」と、考えながら見ていました。

お日様が西の山へ入り、だんだんと夕方近くなりました。

「なあ、みんな、もう帰ろう。おかあちゃんが心配してやで。」

「帰ろう帰ろう。また、明日も遊ぶうな。」

きれいな夕焼け空のなかに、いつも見えている笠形山が、いつそうきれいに見えました。

「わあ、笠形山がきれいやなあ。夕焼けで赤うそまっつとる。」

「ほんまや、きれいわあ。」

「中町にも笠形山とよう似た妙見山という山があるんやで。お椀をかぶせたような山で、ぽっこりしとるんや。」

「へえーっ、その二つの山に虹の橋がかかったらき

れいやろなあ。」

「ほんまや、七色の虹の橋やったらきれいやろなあ。」

「なあ、正太ちゃん、あの笠形山に、あまんじゃこがおるいうのん聞いたことあるか。」

と、里ちゃんが言いました。

「うん、聞いたで。すごく大きいて、いたずらばかりするんやろ。」

「そいで、力も強いんやろ。」

「ほな、あまんじゃこやったたら、笠形山から妙見山まで、橋をかけられるかも知れへんな。大きいてすごい力持ちなんやろ。」

「無理や、無理や、なんぼ大きいて力持ちでもあかんあかん。」

「そうや、山から山へ橋なんかかけられへんにきまっつとる。それに、虹の橋のほうがきれいやわ。」

「そうやなあ。」

それを聞いたあまんじゃこは、

「何やて、わしにでけへんことがあるやて。そんな

ことがあるもんか。」

そこで、反対といたずらが大好きなあまんじゃこは、絶対できないと言われて、

「よし、見とれ！ 一晩のうちに、笠形山から妙見山まで、立派な橋をかけてびっくりさせたるぞ。」

あまんじゃこは、暗くなるのを待って、早速橋づくりにとりかかりました。

「さてと、橋の土台からつくろう。」

力持ちですから、付近にある大きな石をつかんで、片方の手で笠形山、もう片方の手で妙見山へとどんどん積んでいきました。

「よいしょ、もう一つ。」

「よいしょ、それ。」

「よいしょ、それもう一つ。」

と、大きな石をどんどん積んでいきました。

「土台がやっと出来たぞ。こんどは、笠形山から妙見山まで橋をかければいいんじゃない。なにで橋をつくったら良いものか。困ったぞ。」

あまんじゃこは、橋をかけるようになって困ってしまいました。

「そうだ。長い木を探そう。」

と、あたりを見回わしました。あっちの山、こっちの山を探し歩きました。

でも、橋になるような長い木は、見つかりませんでした。

「ないぞ。どうしよう。困ったな。」

あまんじゃこが困っているのを、木の上から見ていたふくろうが、

「ホー、ホー、何をそんなに困っているんだい。」

と、言いました。

「困ってなんかいるもんか。」

と、いい返して、あまんじゃこは、また、探しはじめました。

でも、やっぱりありません。

「ないぞ。どこへ行けば、橋になるような長い木があるんだろう。」

鳴き声が聞こえてきました。

コケッココ

すると、また、ふくろうがやってきて、

「ホー、ホー、ずうーっと向こうのとんがり山へ行ってみな。長い木があるかもしれないよ。」

と、言いました。

「おまえの言うところへなんか行くもんか。わしが探してみせるわい。」

と、言って、ふくろうが教えてくれた方とは、反対の方へ行きました。

あまんじゃこは、ふくろうの言うことを聞こうともせず、山の中を探しましたが、橋になるような木は、どこにも見つかりませんでした。

「ないぞ、ないぞ。どこにもない！」

手当たりしだいに、木を踏み倒し、あっちの山こっちの山を、うろろうしているうちに、どんどん時が過ぎていきました。

「ああ、どうしたら良いものか。」

と、あまんじゃこは、考えこんでしまいました。やがて、あたりが段々と明るくなり、一番どりの

あまんじゃこは、人の言うことを何でも反対したために、笠形山と妙見山に橋をかけることができなかつたけれど、あまんじゃこが積んだといわれる石垣が岩になって、今も、二つの山に残っているという事です。

※いたずらが好きなあまんじゃこが、笠形山から妙見山へ橋をかけようとしたが、もう少しの所で朝になって失敗、また、橋をかけているあまのじゃくに、

それはいいことだというと、ピタリと橋づくりをやめてしまったともいわれている。

「ふるさとみはらの生活誌」「播磨風土記」より



### 川西の八咫鳥さま

やたらす

みんなのおばあちゃんが、まだ子どもの頃のおはなしです。

中野間の川西というところに、澄んだ水がさらさらと流れている谷川がありました。

その川の中には、四角い石や、丸い石がごろごろころがっており、村の人たちは、石を渡って向こうの山へ行っておりました。

庄太のおじいちゃんも毎日この石を渡って、隣の熊じいさんと一緒に山へ、まきを切りに行っておられました。

この谷川の向こうにも大きな岩があり、子どもたちの遊び場でもありました。

「けんちゃん、今日は、じいちゃんとかへ行って木

んますべりしようか。」

「千代ちゃんもよしたるさかいに来いよ。」

「ええわ、私らここでおじゃみするから。なあ、おはるちゃん。」

「うん、この石の上でしような。」

「ほな、おれら山へ行ってくらあ。」

庄太たちは、とんとんと石を渡って山へかけ登って行きました。

千代たちは、川向こうの大きな平べったい岩の上へべたりと座って、おじゃみ遊びを始めました。

お一つお山のおいつばき、おみなさんでおーさーら

お手しゃみ お手しゃみ 落して おーさーら

おつかみおつかみ おーさーら

おちりんおちりんこ おーさーら

おしじやりじやり じゃらりことん

仲良しこよしで おーさーら

しおりとからりと おーさーら